優秀賞

僕と祖父と機械

小学六年　黒田　健太

「僕、大学に行って、機械の勉強をするんだ。」と言うと、祖父は、「そうか、そうか。」とうれしそうでした。

僕の祖父はずっと建設機械の修理を一人でやっていました。祖父は七十九歳ですが、昨年までその仕事を続けていました。お客さんから頼りにされている腕のいい機械修理の職人でした。でも、昨年病気になって、仕事ができなくなってしまい、小さな工場も閉めてしまいました。

僕は、保育園の頃から祖父の仕事をよく見ていました。故障して動かない汚れた発電機やランマーが、祖父が直すとピカピカになって、ちゃんと動くのを見て、「すごいなあ、かっこいい仕事だなあ。」と思っていました。僕が母に、「将来、いいちゃんみたいな、機械の仕事がしたい。」と言うと、母は、

「じいちゃんの遺伝子かな。お母さんはそういう仕事できなかったから、いいちゃんきっと喜ぶよ」と、言ってくれました。

祖父はいつも、

「これからの機械はコンピューターの勉強が必要だ」と、言っていたので、僕は、大学でコンピューターを使ったロボットのような機械の研究をしたいと思っています。そしていつか、人の役に立つ機械の開発をするエンジニアになりたいと思っています。祖父は、

「機械を作る人はたくさんいても、直す人は少ない」とも言っていました。だから僕は、祖父が直せなかったコンピューターが使われている機械を修理する仕事もいいかな、と考えています。

祖父は病気になってしまったけれど、僕の夢が実現するまで、生きていてほしいと思います。大学に入学するのも、そこで勉強するのも、とても大変だけど、祖父の喜ぶ顔を楽しみに頑張ります。